



女と男の新しい生き方を問いかける！

文部省選定
教育映画祭最優秀作品賞
文部大臣賞

わが心の朝

劇映画／16ミリ・カラー・53分

[企画] 堺市

[製作] (株)桜映画社

価格=16ミリ 300,000円
V H S 60,000円
(消費税別)

『青箱』発刊によせて「どうぞ」とより
与謝野晶子 作

かく言えど、
人これを信ぜじ。
山はしばらく眠りしのみ、
みな火に燃えて動きしを。
その昔、彼等、
されど、
そは信せずともよし、
人よ、
ああ、これを信ぜよ、
すべて眠りし女、
今ぞ目覚めて動くなる。



監督／神山征二郎

【キャスト】

真木洋子 高橋長英 音無真喜子
吉田次昭 谷口のぞ美 池田 学
北見唯一 梶本潔 森下鉄朗
町田米子 萩原郁三 采野圭子
関西芸術座 劇団あすなろ

すいせんの言葉

評論家・東京家政大学教授 樋口 恵子

この映画は、女性が自分自身の羅針盤を持つための努力をはじめめる過程を、今日的な視点でとらえています。

主人公が働き始めたことや、自分史を書くことで、すぐ羅針盤が持てるわけではありません。社会に互して働くという新たな行動のなかで、築きあげていくもの——いかえれば「私」という自己発見への旅立ちともいえるでしょう。この映画では、その旅立ちのプロセスが実によく描かれています。

主人公の生き様をみて拍手する人もいれば必ずしも賛成しない人もいると思います。映画を見終った人々が、自分自身に引きよせて何かひとこと言いたくなる。この映画は、そうした問題提起の役割も果しています。皆で一緒に見て大いに話し合い、意見をぶつけあっていただきたいと思います。

労働の問題、子どもたちの問題、家族の問題と現代に生きる女性たちを取り巻く問題がみんな出ていて、話し合い、考えていく材料の宝庫となっている映画です。(談)



わが心の朝

あらすじ

高二の娘・真理と、中二の息子・大介を持つ佐野恵子(40才)は、専業主婦の生活から思い切って働きに出ることにした。証券マンで多忙な夫・清(43才)は、「家事は今まで通りやる」ということでしぶしぶ認めた。

恵子の見つけてきた仕事は、仏具店のパート。張り切る彼女は、職場で早々とパートの限界を思い知らされる。人生半ばに立って自分を見つめ直したい思いの恵子は、「自分史」の講座に入って勉強もはじめる。

しかし、仕事と家事の両立は思ったよりもむずかしい。夫や子どもたちは、以前と同じように家事は万事恵子まかせて手伝おうとはしない。その事で言い争いカッとして家を飛び出した恵子は、講座仲間の三田あかりに呼びとめられる。あかりの家では夫が子どもの世話をしていた。女も男も働いて家事も育児も分担。そして、二人は別々の姓を名のって暮しているという。

その暮しぶりに触発された恵子は、家族に家の独占はやめて分担にすると宣言する。

そんなある日、清の会社の同僚池田が、突然過労で倒れた。

恵子は、働きに出たことによって次第に気づいてきたことを、自分史に書いていく。

製作意図

女子差別撤廃条約が批准され、男女雇用機会均等法が施行された今でも、女性が積極的に社会に参加していこうとするとき、さまざまな障害が待ちうけています。

この映画は、女性の側から女性が社会へ出て働きはじめようとして出会う様々な障害—差別を描き、それを乗り越えていこうとする様子をドラマ化したものです。

なにげない日常の言葉や考え方にも、男は外で働き、女は家を守るといった長い間の性別役割分業の考え方方が支配し、女性が個として自立することを疎外していることが多いのです。

現代の多くの女性たちは、自らの生きがいを求めて自立への道を歩みはじめようとしています。一方、視点を変えれば、女性の社会的自立を阻むものは、同時に男性の生活の自立を阻んでもいるのです。女と男の綱の引きあいからは、有効な解決はみいだせないともいえるでしょう。

女も男も、真に人間的な人生をおくるために、今、どのように協力し合い生きていけばいいのか、この映画は新しい視点からの女と男の生き方を探ろうとするものです。

【スタッフ】

監督／神山征二郎 製作／福間順子 脚本／山本洋子
撮影／山本駿 照明／小山勲 録音／福田伸・瀬谷満
音楽／針生正男 編集／近藤光雄 メイク／金森恵
記録／穂盛文子 助監督／守田健二 製作デスク／山本孝行
製作主任／桑山和之 解説／日色ともゑ

【協力】

堺こおどり保存会 堀市のみなさん

